

現代中国における小学校社会系教科の 学校カリキュラム改革

— 東北師範大学附属小学校の校本教材「社会」の場合 —

宛 彪
(2014年10月2日受理)

A Study on the Reform of the Elementary Social Studies School-based Curriculum
in Modern China

— A case study on the “School-based textbook” of the primary school attached to Northeast
Normal University —

Wan Biao

Abstract: The aim of this paper is to analyze the reform of the elementary social studies school-based curriculum which is developed by the primary school attached to Northeast Normal University in modern China. The result of this paper is the following three. 1) The primary school attached to Northeast Normal University was approached to solve the problems of the Chinese social study education, by developing the “school-based social study textbook”. The curriculum aims to develop the citizenship of the children through the social recognition. It is different to the national curriculum of China which teaches the moral value. 2) The curriculum is organized by the theme which shows the advance of the modern China. 3) The lesson is organized by the problem solving method for solving the social problems resulting social rapid change.

Key words: reform of school-based curriculum, school-based textbook, social problem

キーワード：学校カリキュラム改革, 校本教材, 社会的問題

1. はじめに

現代中国における小学校社会系教育改革には、大きく3つの取り組みが見られる。第1は、国家レベルのカリキュラム改革である。具体的に、教育部は総合社会科を目指した全国版「品德と社会」課程標準を発表した。それに基づく教科書づくりも盛んになっており、

本論文は、博士課程候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：小原友行（主任指導教員）、池野範男、
棚橋健治、木村博一、山元隆春、
草原和博、永田忠道

代表的な教科書には、「人民教育出版社版」「北京師範大学出版社版」「江蘇教育出版社版」がある。

第2は、地域レベルの改革である。それは、主に省・直轄市などの教育改革委員会が編集してきた地方版カリキュラムや教科書編成を指している。具体的には、上海市や広東省などの地方版「品德と社会」課程標準や教科書などが代表的なものである。

第3は、学校レベルのカリキュラム改革である。2003年の国家カリキュラム改革に伴い、全国38の実験区や500余りの実験校において、教育課程改革の実験が行われてきた。これらの実験区や実験校では、研究の自由度が高くなっており、学校レベルのカリキュラム編成も可能になっている。特に、「校本課程・教材」

という学校独自の課程・教材集の開発などの取り組みが盛んになっている。校本課程・教材の開発の特徴は、国家課程標準に基づきながらも、ある程度自由にカリキュラムや単元を修正・開発することができることである。そのねらいは、学校の「開放的・個性化」の教育理念の実現であり、学校独自の修正・開発を通して、研究者たちが編集した課程や教材の適切性を改善するとともに、教師の研究能力及び専門技能を高めることである。

本稿の目的は、第3の取り組みである学校レベルの社会系教科カリキュラム改革の特質や意義を明らかにすることである。そのために、分析対象としては、「品德と社会」という総合社会科の性格をもつ全国版や地方版教科書とは異なり、分科社会科を目指しつつ小学校社会系教科教育改革の新しい方向性を示したものであると考えられる、東北師範大学附属小学校（以下「附属小学校」と略記する）で開発された校本教材「社会」を取り上げて分析する。

具体的には、全国カリキュラムや、それに基づく中国の代表的な教科書である人民教育出版社「品德と社会」や日本の東京書籍版教科書「新しい社会」の内容構成との比較分析を通して、附属小学校校本教材「社会」カリキュラムの特質を明らかにする。さらに、代表的な情報学習単元「我々の生活と情報」を授業構成の視点から分析し、その学習論の特色を明らかにする。そして、これらの考察に基づいて、校本教材「社会」に見られる学校カリキュラム改革の特質とその意義や課題を解明していきたい。

2. 東北師範大学附属小学校における校本課程・教材開発の概要

2.1 学校カリキュラム開発の背景

附属小学校は、国家教育部に直属し、自主的な学校経営権を持つ小学校の一つであり、3つのキャンパスと2つの幼稚園から構成されている児童数8000人の大規模な国立重点小学校である。このため、60年の歴史をもつ附属小学校では、自主的な管理制度が充実している。1980～2000年、附属小学校は改革実験の段階に入り、「小学校総合的素質教育改革実験研究」「小主人教育実験研究」「小学校主体教育実験研究」を行ってきた。21世紀以降、附属小学校は「開放的・個性化」の教育実験段階に入る。このような実験・研究の経験を経て、附属小学校は徐々に民主、開放、自由な学術的雰囲気を形成し、校本教材開発の研究の基礎を充実させている。

校本課程・教材を開発するために、附属小学校では、

専門職の研究員を招聘し、各教科の研究室を設置した。学校の研究員と教員たちは定期的に授業研究会や開発会議を行い、学校独自の課程・教材開発に取り組んでいる。

2.2 校本課程と国家カリキュラムの比較

附属小学校では、国家基礎教育課程計画に基づきながらも、社会のグローバル化に 대응しようとする校本課程を設定している。その結果として、表1に示した通り、国家が定めた小学校の10教科を12教科に変更している。具体的には、社会系教科については、「品德と生活」「品德と社会」2つの総合教科を「生活」「社会」「道徳」という3つの教科に分化させている。

なお、附属小学校の社会系校本教材と国家カリキュラムの内容構成の対応関係を示せば、表2のような対比表を作成することができる。この表からは、以下の3点を読み取ることができる。①国家カリキュラムにおける「品德と生活」の「ルールを守り、クラス、故郷、祖国を愛する」という狭義の道徳教育の部分を教科「道徳」に、②「品德と社会」の「我々が成長している」「私と家庭」という2つの部分を「生活」科に、③「品德と社会」のより社会的な部分のみを「社会」課程に残している。

校本課程・教材開発グループ代表の熊梅校長¹⁾は、このように改革した理由として、以下の3点をあげている²⁾。

第1に、国家カリキュラムにおいて、「品德」「社会」「生活」の3者の統合は、結果的に道徳教育を弱体化させている。なぜなら、教師にとって、総合社会科の特徴の理解や課程目標の実現は難しいからである。第2に、グローバル化の視点から見ると、多くの国家が設置しているのは「社会」と「道徳」であることである。中国では「品德と社会」となっているが、そのことが、

表1 国家課程と附属小学校課程の比較表³⁾

		国家課程					附属小学校課程							
学年		1	2	3	4	5	6	学年	1	2	3	4	5	6
		課程 類別	品德 と 生活	品德と社会					課程 類別	道徳				
科学					生活	社会				科学				
総合実践活動						総合実践活動								
国語					国語									
数学					数学									
外国語					英語									
体育					体育									
芸術（音楽、美術）					音楽 美術									
地方課程・学校課程					情報									

表2 社会系校本課程と国家カリキュラムの対比表

国家カリキュラム (内容標準)		校本課程・教材		
		生活	社会	道德
「品德と生活」	健康・安全の生活	●	●	
	生活を楽しむ	●		
	ルールを守り、 集団、故郷、祖国を愛する			●
	手を動き、生活の創意工夫	●		
「品德と社会」	我々が成長している	●		
	私と家庭	●		
	私と学校		●	
	私の故郷（地域社会）		●	
	私は中国人		●	
世界を見よう		●		

理論構築や世界との比較を難しくしている。第3に、中国においては、新しく創設した「生活」「社会」科は、理論研究と実践の両方とも不十分である。このため、外国の研究や経験を参考にすると同時に、積極的な理論研究や実践の質を高める必要がある。また、2つの総合課程を3教科に分科する目的については、3つの教科を実施することで、各教科独自のねらいを明確にし、その目標実現の効果を高めることができる。

3. 校本教材「社会」カリキュラムの特色

校本教材「社会」カリキュラムの特質をとらえるために、本稿では、そのカリキュラム全体の目標構造を手がかりにする。また、全国版カリキュラムに基づく中国を代表する人民教育出版社教科書（以下「人教版」と省略する）との比較分析を行うことにしていきたい。次頁の資料1は、校本教材「社会」の目標の構造を示している。各単元は、知識目標、技能目標、態度目標という3つの目標から構成されている。

3.1 校本教材「社会」の目標の特色

— 国家カリキュラムとの比較を通して —

(1) 国際社会に生きる公民的資質を育成する全体目標

表3は、国家課程「品德と社会」と校本教材「社会」における教科全体の目標に関する記述を示している。「品德と社会」課程の全体目標は、児童の良好な道德の形成や社会性の発展を促すことである。そのために、児童の社会認識、社会参加、社会適応、愛する心、責任感、良好な行為習慣、個性品質などをもつ社会主義に適応する公民の基礎を育成しようとしている。この

表3 教科の全体目標の比較

課程標準「品德と社会」	校本教材「社会」
「品德と社会」課程は、児童の良好な道德の形成や社会性の発展を促すことをねらっている。それは、児童の社会認識、社会参加、社会適応、愛する心、責任感、良好な行為習慣、個性品質などをもつ社会主義に適応する公民の基礎を定めることである。	「社会」の目標は、児童に社会生活を理解させ、我が国の国情や歴史に関する理解や感情を育てるとともに、国際社会に生きるために、社会主義社会の公民として必要な公民的資質を育てる。

ように「品德と社会」課程では、児童の道德性と社会認識を同時に育てようとしていることが分かる。特に、最終的目標である社会主義に適応する公民の基礎の中身からもわかるように、児童の社会認識、社会参加、社会適応とともに、愛する心、責任感、良好な行為習慣、個性品質などの道德的素養が重視されていると考えられる。

このような国家課程の全体目標に対して、附属小学校では、教科「社会」の全体目標を以下の3つの側面から規定している⁴⁾。

① 児童に社会生活を理解させる。

社会生活とは、社会に関わる人々の生活の状況、多様な活動などを指している。地域の環境、国土の自然環境、我が国の産業と国民生活、人々の生活と我が国の歴史的背景に関連する内容の理解である。

② 我が国の国情や歴史に関する理解や感情を育てる。

地域社会や都市への理解を深め、故郷への誇りや愛情を育てることである。また、自国の地理や歴史を理解させ、祖国に対する強い愛情を育てることである。

③ 国際社会に生きる社会主義社会の公民として必要な公民的資質を育てる。

社会主義社会の公民として必要な公民的資質は、欧米や東アジア諸国のそれと比べて共通点だけでなく相違点もある。社会系教科のねらいは、この多目的、民主的、相互依存の世界において、児童の公民的素質を育成することであり、そのことを通し、児童の公正的、かつ賢明な判断力（原語：決策力）を高めることである。公民に、「社会主義社会の公民としての意識」、「国土、国家の歴史、民族や文化の理解」、「社会生活に溶け込み、社会に参加する態度と能力」、「国家や民族への誇りや責任感」などの資質を育成させるべきである。それが、この課程の意義である。

このように、校本教材「社会」の全体目標は、社会主義社会の公民として必要な公民的資質を育てることであり、それが中心的目標になっている。この目標に見られる附属小学校が育成しようとしている公民像

資料1 東北師範大学附属小学校校本教材「社会」の目標構造⁵⁾

学年	単元	知識目標	技能目標	態度目標
3 学年	① 我々の学校	・学校の内部構造と外部環境を理解する。学校の歴史を理解する。方向を見定める。現地の方角と地図の方角に関する知識を知り、地図作りの手順や図例の役割を知る。	・クラスメート間の簡単な矛盾を処理することができる。 ・多様な学習活動を初歩的に了解し、基本的な学習方法を身につける。 ・ルールを意識し、学校のルールを守る。	・クラスメートと友達との真実な友情を立てる。クラスメートとの友情を感じるし、お互いに尊敬する。 ・学校に親しみ、教師に敬愛する、学校の職員の労働を尊敬する。
	② 都市・地域社会	・自分が住んでいる地域や都市の基本を理解する。特色ある地域の土地利用や交通の状況、主な公共施設などを知る。	・児童の観察、調査、まとめ能力を育成する。 ・初歩的に地図を認識し、使用する。	・地域社会や都市の特色を理解する。自分が住んでいる地域・都市に対する誇りや愛情を育てる。
	③ 人々の仕事と我々の生活	・地域の人々は生産・販売などの仕事をしていることを理解する。彼らは我々の生活を支えている。	・インタビューなどの活動を通して、観察・調査する能力を育成する。具体的に労働者の状況を観察して調査する。	・地域の労働者の仕事を調査し、彼らの苦勞を感じる同時に、その仕事を理解する。
	④ 我々の生活を保護する	・事故や災害に離れ、人々の安全を守るための組織を知る。地元の安全施設を理解し、安全保護仕事の方法をまとめる	・児童は、調査・訪問の形式で各部門を理解する。児童の調査・訪問する能力を育てる。	・社会安全を保護する組織や人々の仕事の価値を体験する。
4 学年	⑤ 快適な生活を作る	・健康な生活のために、ごみの処理や回収再利用などに人々の共同的努力が必要である。	・見学や社会調査を通して、情報収集の方法を身につける。文章、図表などを通して自分の学習成果や意見を表現する方法を身につける。	・生産や生活に出したごみに興味を引き、ごみの処理や再利用に関心を持つ。 ・生活用水に関心を持ち、調査活動を通して、飲用水とその処理の方法などの問題について、自主的に学習させる。
	⑥ 故郷の生活の変化	・人々の生活の変化やよい暮らしを期待している気持を理解する。	・生産道具の変化をはじめ、過去と現在生活の変化、当時人々の気持ちを考える。 ・見学、調査、などの活動を通して、図表、カード、実物、写真など自分の意見や学習成果を発信する多様な方法を身につける。	・過去の生産道具の使用法や生活状況に関心を持つ。 ・見学、インタビュー、調査に積極的に参加し、調査を進展させる。
	⑦ 春城の物語	・故郷の歴史や発展を理解する。	・文字資料やインターネットを活用し、学習する。文字や写真など多様な方法を使い、自分の学習成果を発信する。	・故郷の歴史に興味を持ち、社会調査を育成する。
5 学年	⑧ 我々の生活と食品生産	・我が国の農業は、国民生活の中で重要な役割を果たしていることを理解する。農業生産と自然環境との深い関連を認識する。	・我が国の農業の現状を調査する。 ・地図や地球儀を活用する上で、適切に資料を整理し、調査の結果を示す。	・我が国の農業生産の現状に関心を持つ。 ・積極的な調査を通して、国民の生活を支える食品生産や開発への関心を深め、児童の節約意識を形成させる。
	⑨ 我々の生活と工業生産	・我が国の自動車産業の発展や現状の学習を通して、工業発展が国の経済発展の重要な作用を理解する。	・我が国の工業の現状を正しく調査する。適切な方法を活用し、資料を整理し、調査の結果を示す。	・我が国の工業発展の現状に関心を持ち。積極的な調査を通して、国民の生活を支える工業生産への関心を深める。
	⑩ 我々の生活と情報	・情報は、我々の生活によく利用されている。それは現代に必要な不可欠な要素である。	・児童に情報を収集・整理・利用する能力、調査訪問の方法を身につける。	・調査、インタビューなどの方法を通して、我々の生活にある情報は優劣があり、情報を正しく判断する能力を養う。
	⑪ 我々の国土と環境	・我が国の位置、地形、気候の概要など自然環境の特色を理解する。 ・環境と人間の生活との関わりを理解する。	・我が国の国土の現状を調査し分析する能力を育成する。	・自然環境と人間の生活、生産との関係を考える同時に、大自然に対する愛情を育てる。
6 学年	⑫ 古い歴史をもつ中国	・国家や社会の発展大きな役割を果たした先人の功績や優秀な文化遺産を知る。	・多様な社会現象を調査する。図表などの基礎資料を活用する。調査の結果を発表する同時に、広い視点に問題をとらえる能力を育成する。	・先人の業績や優秀な文化遺産に興味を持つ。それらの理解を深め、我が国の歴史や伝統を重視し、国に対する愛情を育てる。
	⑬ 屈辱をしない中国	・中国が長い時期に形成されてきた民族精神や優良な伝統を理解する。 ・中国の発展に関わる重大な歴史事件を理解する。	・歴史を了解し、認識する方法を身につける。 ・歴史に関心を持ち、問題を解決するための歴史的な見方を児童に形成させる。	・近代、列強の侵略が中華民族に与えた屈辱、苦難、危害を理解する。それらの学習を通して、児童の民族自尊心や愛国主義感情を育てる。
	⑭ 飛躍する中国	・中国の成立や祖国の建設の偉大な成就を初歩的に理解する。現在中国の国際的地位を知る。	・歴史資料を整理することを学び、生活の中に歴史を整理し、歴史学習の方法を学び。 ・情報の収集、整理、読み解き、処理。	・祖国の進歩と発展を誇り、共産党と祖国への愛情を深める。 ・児童に責任感、使命感、公民意識を育てる。
	⑮ 国家の主人	・人民代表大会制度を理解する。人民代表は、どのように選出されたのか。彼らが社会生活に発揮した作用を理解する。共和国、公民、人民代表などの概念の意義を理解する。	・社会主義国家の優越性を理解する。権利と義務の角度から、個人の行為の合理性と合法性の判断を試みる。	・共和国への愛情を深める。 ・法律への信頼と尊敬を形成させる。 ・積極的に社会生活に関心を持つ。社会生活に参加する。
	⑯ 地球村を抱き合う	・人類は地球の形状、大きさを認識する過程と海陸分布を初歩的に了解する。 ・世界の国、人口、種族、言語などを了解する。 ・世界に有名な人文遺産、象徴する建物、自然風景などを了解する。 ・世界各地の人々は多様な生活習慣や祝日をもって暮らしていることを理解する。	・多様な方法を通して資料を収集する。資料の整理能力、発信力を身につける。 ・初歩的な地図能力を形成する。	・異なる国家の多様な文化や民族習慣を理解し、尊敬する。 ・平等の概念を形成し、覇権主義を反対し、民族差別を反対する。
⑰ 唯一の地球	・人口の急速的な発展は多くの社会問題と環境問題をもたらした。人類は環境との共同的な発展の道理を知る。 ・地球が直面している大気汚染、砂漠化、温室効果、資源の欠乏などの環境問題を知る。	・環境保護活動に積極的に参加する。	・自覚的に環境を保護する意識を形成する。	
⑱ 世界の中の中国	・事例を通して、国際連合、子ども基金会、国際連合教育科学文化機関などの意味を理解する。	・中国との関係が深い国の1つを選び、その国の現状、人々の生活などの調査計画を作成し、地図、写真、図表、活字資料などを使って総合的に分析する。	・平和的な世界を構築するために、世界各国の人々がどのように協力するのか。 ・国際協力に関心を持つ。自分ができることを考える。	

は、国家カリキュラムと比べ、社会生活の理解だけでなく、国際社会に生きるためのグローバルな公民的資質の育成を目指していると考えられる。

(2) 社会の変化や問題の認識を中心にした知識目標

校本教材の「知識目標」「技能目標」「態度目標」の配列と異なり、国家カリキュラム「品德と社会」課程標準においては、その教科の目標を「情感・態度・価値観」「能力」「知識」の順番に配列している。国家カリキュラムに知識目標に関連する記述は表4に示している。それを資料1の知識目標と読み比べると、校本教材の知識目標については、次のような2つ特色が見られる。

第1に、資料1からもわかるように、校本教材では、国家カリキュラムが定めた「児童の権利と義務」「個人と集団の関係」「社会的ルールや法律と公共生活との関係」などの道徳教育に関する目標が含まれていないことである。

第2に、それは、現代中国の社会の変化や社会的問題を中心に取り上げていることである。例えば、単元④生活に関わる安全問題、⑤環境汚染に関わるごみの回収問題、⑧平和問題などがある。また、校本教材の内容構成を3-6学年の系統からみると、それは「学校・地域に関連する地理的な内容」(単元①②③)、「生活に関わる安全問題」(単元④)、「健康な生活に関連する水汚染、ごみ回収問題」(単元⑤)、「地域の歴史」(単元⑥⑦)、「農業」(単元⑧)、「工業」(単元⑨)、「情報」(単元⑩)、「国土」(単元⑪)、「歴史」(単元⑫⑬⑭)、「政治」(⑮)、「国際に関連する問題」(⑯⑰⑱)という構造になっている。

表4 国家カリキュラムにおける知識目標

「品德と社会」課程標準
<ul style="list-style-type: none"> ・児童の権利と義務 ・個人と集団の関係 ・社会の組織 ・社会的ルールや法律と公共生活との関係 ・生産消費と人々の生活の関係 ・科学技術の発展と人類の生存や発展との関わり ・基本的な地理知識を知る ・人類と自然・環境との依存関係 ・人類社会が直面している問題

(3) 探究力・問題解決力を重視した技能目標

国家カリキュラムにける技能目標に関連する記述は、表5のようになっている。それを資料1の技能目標と読み比べると、校本教材の場合は、以下の3点の特色を抽出することができる。

第1に、社会生活の学習に求められる「調査」に関する技能を重視している。具体的には、「情報を収集・整理・利用」「見学・訪問・調査の方法」などである。

表5 国家カリキュラムにおける技能目標

「品德と社会」課程標準
<ul style="list-style-type: none"> ・自己認識。自分の気持ちや行為をコントロールする。 ・自己保護。良好な生活習慣や行為習慣を形成する。 ・自分の感受や意見を伝え、他人の意見を聞く。他人との平等な交流や合作をする。民主的な集団生活に参加する。 ・多角的に社会現象や事象を観察、分析、認識する。生活の問題を合理的に探究し、解決する。生活の中の道徳問題を合理的に判断と選択する。 ・社会的情報を収集、整理、分析、活用することを学び、簡単な学習の道具を使い問題を説明・解釈する。

例えば、4学年単元「故郷の生活の変化」では、「生産道具の変化をはじめ、過去と現在生活の変化、当時人々の気持ちを考える。見学、インタビュー、調査、などの活動を通して、図表、カード、実物、写真など自分の意見や学習成果を発信する多様な方法を身につける」という目標を設定している。

第2に、児童の将来の社会生活に実用的な能力の育成を配慮していることがわかる。例えば、3学年の単元②の地図を活用する能力、5学年の単元⑩で設定されている情報ネットを活用する能力などがある。

第3に、児童に社会参加意識をもたせるために、探究や問題解決のような能力の育成もねらっている。例えば、6学年単元⑬では、「問題を解決するための、歴史的見方を児童に形成させる」のような技能目標を設定している。

(4) 社会参加を重視した態度目標

国家カリキュラムにおける態度目標に関連する記述を示したのが、表6である。それを資料1の態度目標と読み比べると、例えば、単元①②⑫⑬⑭⑮などの単元にみられるように、友情、国や地域への誇りや愛情、労働者や多民族への尊敬など、情意に関連する態度目標は両者に共通している。しかし、資料1からも読み取れるように、大きな相違点として次の2点がある。

1つは、校本教材「社会」は、児童が社会参加するための意欲、社会問題に対する判断力など、社会の改善に向けた実践に関連する態度目標である。例えば、単元⑤⑥⑦⑮⑰⑱などがある。2つは、社会的事象を深く理解するために、児童の生活に関わる産業、組織、人物など社会形態への関心、体験に関連する態度目標である。例えば、単元②③⑦⑧⑨⑱などがある。

表6 国家カリキュラムにおける態度目標

「品德と社会」課程標準
<ul style="list-style-type: none"> ・命を大切にし、生活愛する。 ・自尊、楽観向上、科学愛する、労働愛する、勤労節約。 ・文明礼儀、誠実、寛容、平等公正、集団愛する、団結合作、責任心。 ・民主法制の観念、ルール意識。

このような態度目標の特色としては、国家カリキュラムが道徳的価値を中心とした態度目標となっているのとは異なり、社会認識を通して、社会への関心や参加する態度の自己形成を重視しようとしていることである。例えば、単元⑬では、次のような態度目標になっている。平和な世界を構築するために、世界各国の人々がどのように協力するのか、国際協力に関心を持つ、自分ができることを考えさせ、自ら国際協力意識を形成させるとなっている。

3.2 校本教材「社会」の内容構成の特色

一人教版や東京書籍版との比較を通して一

校本教材「社会」の内容構成の特色を明らかにするために、ここでは、中国の小学校社会系教科を代表する人教版教科書「品德と社会」や、日本の小学校社会科を代表する東京書籍版「新しい社会」の内容構成を取り上げ、比較分析を行っていく。それらの主な内容構成を示したものが、表7である。

表7からは、校本教材「社会」の内容構成の特色としては、以下の2点を指摘することができる。

表7 3社の内容構成の比較表

学年	東京書籍版「新しい社会」	校本教材「社会」	人民教育出版社「品德と社会」
3 学年	①私のまち、みんなのまち ②はたらく人々とわたしたちの暮らし ③かわってきた人々の暮らし	①我々の学校 ②都市・地域社会 ③人々の仕事と我々の生活 ④我々の生活を保護する	①家庭、学校、地域社会 ②学びの中で成長する ③ルールの子になる ④私の役割と責任 ⑤温かい愛の光 ⑥仲良く共存する私たち ⑦私たちの生活に必要な人々 ⑧道を探す
4 学年	④くらしを守る ⑤住みよいくらしをつくる	⑤快適な生活を作る(ごみ処理) ⑥故郷の生活の変化 ⑦春城の物語	⑨命を大事に ⑩安全な生活 ⑪お金使いの学問 ⑫他人への思いやり ⑬私の故郷 ⑭生産と生活 ⑮交通と生活 ⑯通信と生活
5 学年	⑥わたしたちの国土 ⑦私たちの生活と食料生産 ⑧わたしたちと工業生産 ⑨情報化した社会とわたしたちの生活 ⑩わたしたちの生活と環境	⑧我々の生活と食品生産 ⑨我々の生活と工業生産 ⑩我々の生活と情報 ⑪我々の国土と環境	⑰誠実と信用 ⑱我々の民主生活 ⑲祖国の山水を愛する ⑳大家族である多民族国家 ㉑成長の喜びと悩み ㉒根拠を知ろう ㉓魅力のある中華文化 ㉔私たちの生活している地球
6 学年	⑪日本の歴史 ⑫わたしたちの生活と政治 ⑬世界の中の日本	⑫古い歴史をもつ中国 ⑬屈辱をしない中国 ⑭飛躍する中国 ⑮国家の主人 ⑯地球村を抱き合う ⑰唯一の地球 ⑱世界中の中国	㉕文明に向かっている ㉖屈辱しない中国 ㉗飛躍している中国 ㉘世界を漫遊する ㉙人類の家(小単元唯一の地球) ㉚同じ青空の下に ㉛小学校生活さようなら

第1に、校本教材「社会」は、主に日本の東京書籍版教科書「新しい社会」の内容構成の枠組みを活用しながら、編集されていることである。大きくみれば、両者の基本的な学習内容や配列は共通している。両者を比較すれば、その相違点は、学習内容の分割や配列の微調整がなされているだけである。具体的には、東京書籍版3学年の単元③「かわってきた人々の暮らし」は、校本教材4学年の単元⑥故郷の生活の変化、⑦春城の物語という2つの単元に分割されている。また、東京書籍版5学年の単元⑥「わたしたちの国土」は自国の国土に関連する内容と世界の国土に関連する内容であるが、校本教材の5学年⑪「我々の国土と環境」や6学年の単元⑬「地球村を抱き合う」という2つの単元に分けられている。このような類似した構成からもわかるように、附属小学校の校本教材の開発においては、日本の小学校社会科から強い影響を受けていることが分かる。

第2に、人教版教科書「品德と社会」と校本教材「社会」を比較すると、校本教材は人教版教科書の多く事例を参考して取り入れている。例えば、校本教材「社会」の単元⑬唯一の地球は、人教版教科書6学年の単元⑲「人類の家」の一部から抽出して、再構成したものである。校本教材の単元⑬「屈辱しない中国」や⑭「飛躍している中国」は、人教版教材の単元⑲⑳㉑を参考して構成されている。

このように、附属小学校の校本教材「社会」は、中国の代表的な人教版教科書や日本の東京書籍版教科書「新しい社会」の内容を参考にしながら作成されていることが分かる⁶⁾。

4. 校本教材「社会」の授業構成の特色 —第5学年単元「我々の生活と情報」の場合—

次に、附属小学校の校本教材「社会」は、どのように単元の授業が構成されているのかについて考察していく。取り上げるのは、社会の情報化やその中での課題を中心に構成されている、第5学年の中単元「我々の生活と情報」である。単元全体の展開を示せば、資料2のようになっている。

4.1 単元「我々の生活と情報」の概要

単元「我々の生活と情報」の目標は、情報が我々の生活によく利用され、現代社会の生活に必要な要素であることを理解することである。具体的には、調査活動やインタビューなどの方法を通して、情報産業や情報化の進展、人々の生活への影響、情報の有効な活用が大切であることなどを理解することがねらい

現代中国における小学校社会系教科の学校カリキュラム改革
 — 東北師範大学附属小学校の校本教材「社会」の場合 —

資料2 5学年単元「我々の生活と情報」の展開

	教師の主な問いと指示	児童の学習活動	・引き出したい知識
我々は情報化社会に 小単元1	●わたしたちは、どのような情報に囲まれているのか。 ・街に、どのような情報があるか。 ・家庭に、どのような情報があるか。 ・どのような方法で私たちに伝えるのか。	・まちと家庭の中、二枚の写真から身の回りにどのような情報があるか話し合う。 ・グループ討論	・わたしたちは、様々な手段から情報を入手していること。
	○過去（30年前）に、主にどのような情報伝達の方法があるのか。 ○過去と現在情報伝達方法について、どのように変化していたのか。	・過去の主な情報伝達の方法を調べる。 ・過去と現在情報伝達方法の比較し、グループごとに発表する。 ①公衆電話→携帯電話 ②テレビチャンネルの数が増えている。 ③パソコンが普及してきた。	・情報を伝える方法が多様である。 ・過去に比べ、情報を伝える方法が多くなった。 ・過去に比べ、情報を伝える速度が速くなった。 ・過去に比べ、情報の量が豊富である。
小単元2 情報産業と我々の生活	●テレビ放送は、情報をどのように伝えているのか。 ○テレビから得た情報はどのように活用するか。 ・自分あるいは家族はどのようなテレビ番組が好きなのか。 ・これらの番組からどのような情報を得たのか。 ・これらの情報をどのように生かすのか。 ○多様な情報は、私たちの生活にどのような役割を果たしているのか。 ○わたしたちは、テレビの伝える情報をどのようにいかしているのでしょうか。 ○情報の発信者や受信者は、どのようなことを注意すべきか。	○一日の中でテレビ放送からどんな情報を得ているか。具体的にあげ発表し合う。 ○テレビから得た情報をどう活用しているか話し合い、学習問題を設定する。 ・話し合い、発表する。 ・話し合い、発表する。 ・討論 ・グループ討論	・テレビの定義：情報を正しく、早く、全面的に放送・伝播するルート、環境、媒体手段である。 ○テレビには、我々の重要なメディアである。我々の生活に大きな役割を果たしている。しかし、悪い影響もある。 ・情報は、正しいと間違っている情報がある。情報の適切性もある。 ・発信者の責任：情報の公平・公正さを知る。受信者の立場に立った工夫すべきである。 ・受信者は、多様な情報を比較し、正しく判断すべきである。
	○テレビ局は、どのように情報をわたしたちのもとに送っているのか。 ・なぜ、人々はニュース番組を好きなのか。 ・ニュース番組は、どのように作ったのか。	・テレビ局のホームページを調べたり、ニュース番組づくりにかかわる人々のインタビューを読んだりして、分かったことや疑問に思ったことを発表し合う。 ・番組局の記者に聞き取り調査を行う。	・テレビ局の番組づくりの過程 ・テレビの番組を放送する時は、視聴者の時間帯に合わせてプログラムを編成していること。
	○メディアとわたしたちはどのような関係をつくっていったのか。 ・マスメディアとは何か。 ・テレビ以外にどのようなメディアがあるのか。 ○マスメディアは、どのような特徴があるのか。 ・マスメディアを活用する。	・テレビ、パソコン、携帯、ラジオ、新聞、雑誌など具体的なマスメディアがどのような内容を提供しているのかについて発表する。 ・様々なメディアの特ちょうについて調べてまとも話し合う。 ・テレビと比べ、それらのマスメディアの特徴を考える。	・マスメディアの媒体：紙類、音声類、ビデオ類などがある。 ・テレビ、ラジオ、新聞、ざっし、インターネットなど伝える速さや時間、便利さ、利用しやすさ、記録の保存のしやすさなどによってその特長があること。
	●わたしたちは、暮らしの中でどのように情報ネットワークを利用しているのか。 ・どんな問題を解決してきたのか。自分の感想はどうなるか。 ・過去に比べ、情報ネットワークの特徴を考え。 ・情報ネットワークはどのように情報を交換しているか。 ○情報ネットワークは人々の生活にどのような影響を与えるのか。	・暮らしの中でどのように情報ネットワークを利用しているのでしょうか。 ・実際に家庭でどのように情報ネットワークを活用しているか事前に調べておく。 ・コンピューターや携帯電話で情報を受け取っている具体例を発表する。 ・情報ネットワークを利用し、インターネットの情報交換の原理を調べる（放課後調査）	・情報ネットワークの分類：資源共有類→資料を調べることができる。（文字、写真、ビデオなど） 新聞サイト→ニュース ビデオサイト→映画、音楽など ・メッセージを発信する。QQ、MSN、Skype。 ・ネットは我々の生活方式を変えている。 生活は便利になっている。 ・ネットで買い物
小単元3 社会を変える情報	○カルテにどのような情報が含まれているか。 ・病院では、情報をどのように活用しているのでしょうか。 ・病院の情報化、電子カルテの役割を考えよう。	・話し合い ・課題研究（病院の情報化・電子化の影響を調査する） ・病院の受付、自動化になった薬局のビデオを観察する。	・カルテに含まれる情報を理解する。 ・病院は、電子カルテなど情報化の進展によって便利に利用できるようになってきたこと。
	・総合病院と他の医療機関はどう違うか。 ○我々の地域では、どのような病院があるのか。 ・それはどのような特徴を持っているのか。 ・総合病院やクリニックがどのように情報を共有するか。 ・120救急車の情報ネットワークはどのような役割を果たしているのか。	・生活経験を考え、多様な医療機関の特徴を考える。 ・地域病院（クリニックなど）や総合病院の基本的な役割を考え、話し合い。 ・救急車は、どのようにコンピューター、携帯電話などを利用しているかを討論する。	・社会には、総合病院、漢方病院、民族病院、専科病院、リハビリセンターなど多くの病院がある。 ・これらの病院に情報ネットワークで繋がる必要がある。 ・情報ネットワークはわたしたちの生活にどのように役立っているかを考え、医療現場における情報ネットワークの活用によりわたしたちの命や健康が守られていること。
	○情報化が進むことで、これからの病院と患者とのつながりは、どのようになっていくのか。 ・遠隔医療はどのように実現するか。 ・遠隔医療はどのような役割をはたしているのか。	・情報化の進歩により、離れていても医療相談ができるシステムを資料から知り、その利便性についてわかったことを発表し合う。	・情報化の進歩により、離れていても医療相談が可能になっている。 ・遠隔医療を実現するために、ビデオ電話、情報交換するためのコンピューターなどが必要である。

小 単 元 4 情 報 の 活 用	<ul style="list-style-type: none"> ●わたしたちは、情報とどのようにかわかっていったらよいか。 ・電車によく医薬品や病院の広告を見られるが、それ以外のところに、どこに、どんな広告があるか。 ・広告はどのように分類するか。 ○公益広告やコマーシャルな広告がどのような役割を果たしているのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の中に溢れている情報について広告を例に発表し合う。 ・印象が深い広告を思い出し、その影響を話し合い。 ・増えてきている広告の苦情について調べ、情報を活用する方法について話し合い、学習問題を立てる。 ・ワークシートに、広告から得た情報やその影響を記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・我々は情報に囲まれている。 ・消費者は、コマーシャル広告を通して商品の特色を理解する。 ・公益広告は、道徳規範、社会規範、生活理念などの価値を伝えている。 ・情報化時代に生活するために、我々は自分のことを保護することを学び。その同時に、合理的に情報を利用し、社会に適応し、生活の品質を高めることが必要である。
	<ul style="list-style-type: none"> ○わたしたちは、生活のなかで、どのように情報を活用しているのか。 ・自分と家族は、どのように情報化ネットワークを利用するか。その時の気持ちは、どうなったか。 ・スーパーは、どのように商品を管理しているのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○わたしたちの生活になくはならないものになっている携帯電話について調べ、発表し合う。 ・携帯から得た情報を調べ。 ・インターネットから得た情報を調べ。 ・身近なスーパーや銀行の情報化について話し合い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パソコンやスマホを通じてインターネットを利用することが、人々の生活に欠かせないものになっている。 ・日常生活に情報ネットワークの利用を通して、われわれの生活は便利になっている。 ・情報化ネットワークを活用した銀行、スーパーなどの産業を取り上げ、生活は便利になっていること。
	<ul style="list-style-type: none"> ○情報を活用するときに、どのような問題があるのか。 ・携帯電話の機能は、どのように変化していたのか。 ・人々は、インターネットを楽しみする同時に、どのような問題があったのか。 ・インターネットの特徴は何か。 ・間違った情報を発信したら、どうなるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報化の進展によって生じている問題点について資料をもとに調べ、話し合う。 ・わたしたちは、情報を受け取る側だけでなく、発信する側にもなることに気づき、どのようなことに気をつけたいかについて討論し、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パソコンや携帯電話の普及につれて、インターネットなどが原因の犯罪が増えていること。 ・インターネットを使つたいじめが増えて社会問題化していること。 ・個人情報もれるなど、人々の権利をおびやかす事件が発生していること。 ・メディアリテラシーを身につけることが必要なこと。
	<ul style="list-style-type: none"> ○情報活用について自分たちの考えをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○これまで情報について学習してきたことをまとめる。 ○情報化した社会に適應するために、学習をもとにわかったことや考えたことをまとめ、発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マスメディアなど情報産業とのかかわり ・情報ネットワークなど、情報化の進展について ・個人情報の扱いなどメディアリテラシーについて

(東北師範大学附属小学校校本教材「社会」5学年より抽出、筆者作成)

となっている。このような社会の情報化に伴う多様な社会的事象を認識することが中心であり、それと同時に、情報を正しく判断する能力という実践的能力の育成をも配慮している。

中単元は、4つの小単元から構成されている。各小単元の主な学習問題を示したものが、表8である。中単元全体は、情報はどのように伝えられているのか(小単元1)、情報化社会にはどのような役割や特徴があるのか(小単元2)、情報化社会にはどのような問題点があるか(小単元3)、生活の中で情報をどのように活用したらよいか(小単元4)という学習問題の展開になっている。換言すれば、すなわち、中単元全体のMQと考えられる「わたしたちは、情報とどのようにかわかっていったらよいか」について考える問題解決的学習の展開になっていると考えられる。

表8 中単元「我々の生活と情報」の全体構造

単元名	各小単元の学習問題 (MQ)
小単元1 我々は情報化社会にいる	Q1 わたしたちは、どのような情報に囲まれているのか。
小単元2 情報産業と我々の生活	Q2 テレビ放送は、情報をどのように伝えているのか。
小単元3 社会を変える情報	Q3 わたしたちは、くらしの中でどのように情報ネットワークを利用しているのか。
小単元4 情報の活用	MQ わたしたちは、情報とどのようにかわかっていったらよいか。

4.2 単元「我々の生活と情報」授業構成の特色

(1) 社会の変化に伴う社会的問題の教材選択

単元「我々の生活と情報」では、まず、小単元1「我々は情報化社会にいる」において、過去と現在の情報を伝える方法の比較という事例を取り上げている。具体的には、電話、テレビ、パソコンなどの事例を通して、情報を伝える方法の変化を児童に認識させ、情報産業の発展、我々は情報化社会に生きていることを児童に認識させている。

次に小単元2「情報産業と我々の生活」では、情報化産業と人々の生活の関係を認識するために、テレビ産業を学習教材として取り上げている。

さらに、小単元3「社会を変える情報」においては、医療に活用してきた電子カルテや遠隔医療などの事例を取り上げ、情報の役割を児童たちに認識させている。

最後に、小単元4「情報の活用」では、情報の優劣に関連する広告、迷惑メールという事例を取り上げ、特に、インターネット犯罪などの情報化社会の進展に伴い生じた社会的問題を取り上げている。児童に、情報化社会の問題点を自覚し、これからの生活においてどのように情報を合理的に判断し、どのように利用していくのかについて考えさせるための事例である。

(2) 問題解決学習としての学習過程

ここでは、小単元4「情報の活用」を具体例として取り上げる。この小単元では、情報の活用の方法につ

いて次のように学んでいる。

第1時では、生活の中に溢れている情報としての広告を取り上げている。具体的には、急激に増加している広告への苦情について調べ、情報を活用する方法について話し合い、学習する。これらの活動を通して、情報化時代に生活するために、我々は自分自身の個人情報保護が必要であることを学び、合理的に情報を利用し、社会に適応し、生活の質を高めることが必要であることを児童に認識させる。第2時では、情報化ネットワークを利用したスーパーや銀行の事例を通して、社会の情報化に伴い、我々の生活が便利になったという情報化社会の役割を理解する。第3時では、インターネット犯罪の事例を取り上げ、児童に情報化社会の問題点を理解させる。最終的には、情報を選択・発信する際に注意することを考え、メディアリテラシーを身につけ責任ある行動をとることの大切さを児童に認識させるような展開となっている。

このような学習過程に基づけば、図1のような本単元の問いの構造図を作成することができる。

本単元ではまず、情報化社会のもつ問題点を引き出すために、Q1によって、公益広告や商業的な広告、それぞれの特徴を児童に認識させることである。具体的には、SQ1やSQ2を設定し、児童の日常生活によく見られる広告の事例を学習する。このような学習を通して、児童に情報化時代に生活するために、我々は自分の生活を守ることを学び、それと同時に、合理的に情報を利用し、社会に適応し、生活の品質を高めることが必要であることを自覚させるようになっている。

次に情報の活用方法を導かせるために、具体的にSQ3、SQ4の学習を通して、小単元のQ2「わたしたちは、生活のなかで、どのように情報を活用しているのか」を学習する。

さらに、本小単元の本題にあるQ3「情報を活用

するときに、どのような問題があるのか」の学習に導入している。具体的にSQ5-SQ8などの携帯電話やインターネットなどの情報を活用するときの問題点を児童に発見させ、最終的に、情報活用について自分の考えをまとめる。なお、実際には隠されているが、このような学習は、大枠としては「情報をうまく利用するために、どうしたらよいか」という問題の解決を考える学習過程と捉えることができよう。

(3) 調べる学習を重視した学習活動

本単元で取り上げられている学習活動の特色については、以下の3点にまとめることができる。

第1に、本単元の中心的な学習活動は、調査、インタビュー、資料の整理、発表などによる調べ学習となっていることである。具体的には、小単元1の「過去の情報伝達の方法についての調べる学習」、小単元2の「番組の記者へのインタビュー」、小単元3の「家庭でどのように情報ネットワークを活用しているかについての調査学習」、小単元4の「情報化の進展によって生じている問題点についての調べ学習」などが取り上げられている。

第2に、これらの調べ学習を通して、情報ネットワークを活用する方法のような、グローバル社会に生きるために必要な実践的なスキルを育成しようとしていることである。例えば、小単元2のパソコンを利用して、テレビ局のホームページを調べる活動。小単元3の情報ネットワークを利用し、インターネットの情報交換の原理を調べる学習などがある。

第3は、調べ学習以外にも、児童の判断力を高めるために、討論、発信のような学習活動を取り入れていることである。例えば、小単元4では、「わたしたちは、情報を受け取る側だけでなく、発信する側にもなることに気づき、どのようなことに気をつけたらよいか」についての討論や発表活動を行うようになっている。

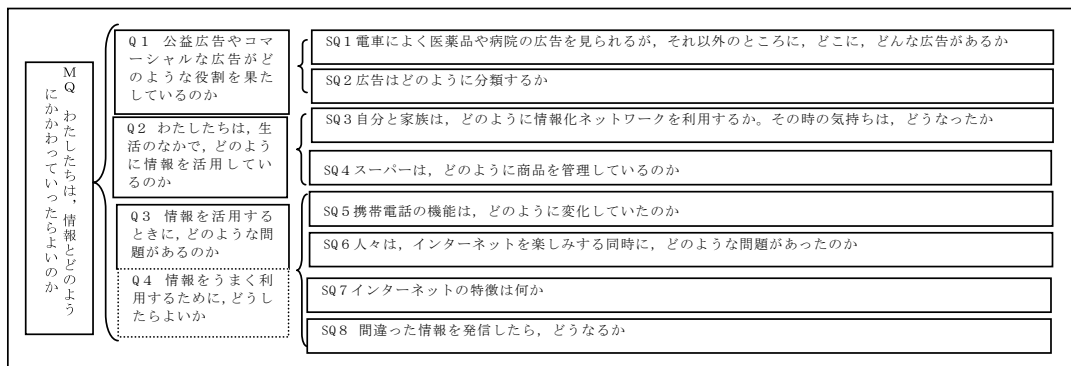


図1 小単元「情報の活用」問いの構造

5. おわりに

本稿では、附属小学校において開発された校本教材「社会」の分析を行い、学校カリキュラムの特質として、以下の3点を明らかにした。

第1に、附属小学校は、学校独自のカリキュラム・教材開発に取り組み、分科社会科のカリキュラム編成によって、現在中国が直面している小学校社会系教科教育改革の問題点を克服しようとしていることである。全国版カリキュラムの道徳的価値を形成しようとするものとは異なり、社会認識を通して公民的資質を育成する新たなカリキュラムを開発しようとしていることである。

第2に、その目標を実現するため、校本教材「社会」のカリキュラムは、現在中国における社会の急速な変化や、それに伴う社会的な課題や問題を中心に内容構成がなされていることである。

第3に、取り上げた社会の変化や社会的な課題・問題を、問題解決的な学習過程の形式で学習させることを通して、最終的に社会への関心や参加への態度の形成をねらおうとする、広い意味では問題解決学習型の単元の授業構成を取り入れようとしていることである。

このような特質をもつ附属小学校における社会系教科の学校カリキュラム改革の取り組みは、以下の3点で先駆的なものとして評価できる。

第1に、中国の小学校社会系教科教育を、「道徳性と社会認識を同時に育成する」から「社会認識を通して、公民的資質を育成する」へと転換することによって、科学的な社会認識教育を目指そうとしている点である。このことは、広領域の「品徳と生活」「品徳と社会」を「道徳」「生活」「社会」に分科させることによって、教科の性格を固有の役割に徐々に純化させながら、社会科独自の目標、内容、方法で学習するという方向性を追求しようとするものになっており、その点でも評価できる。

第2に、日本の社会科教育理論を一つの手がかりとしてカリキュラムを編成しようとしていることや、国内外で開発された優秀な単元授業を取り入れ、それらを再編成することによって内容構成を図ろうとするなど、従来中国では見られなかった社会系教科教育の理論や実践の研究成果に基づいてカリキュラムのレベルを高めようとして点である。

第3に、中国の教員養成制度が不十分であることもあり、現代中国の社会系教科の教員は、主に地理、歴史、政治学などを専門とするものが圧倒的であるが、附属小学校でのカリキュラム開発を通しての教員の実践的

力量形成という取り組みは、中国における社会系教科教員の養成の課題の克服という点でも先駆的意義があると考えられる。

このように、附属小学校の校本教材開発は、全国・地方レベルとは異なる学校レベルのカリキュラム改革として評価することができるが、人民教育出版社版や日本の東京書籍版の教科書の応用段階にとどまっておらず、学校や児童の実態に応じた独自の理論構築に基づくカリキュラム開発という点では、課題が残されている。また、社会的な課題や問題を取り上げ、その解決策を考えることを通して社会への関心や社会参加意識を高めようとする問題解決型の学習論の模索がなされているが、課題や問題の背景やその要因を深く探究する場面が欠落しているなど、授業論としても克服すべき点もみられる。

【註】

- 1) その編集代表者の熊梅校長は、東北師範大学において教育学部課程教学論を専門とする教授でもある。日本の筑波大学に留学した経験もある。
- 2) 2013年3月15日、附属小学校の熊梅校長へのインタビューから、筆者が整理した。また、このインタビューにおいて、本稿で使用している附属小学校の教材集、授業記録など課程開発に関連する資料（ビデオ、活字）の使用権を得た。
- 3) 熊梅(2009)『校本課程開発の行動に関する研究』、教育科学出版社、p.22を参照。
- 4) 同上、p.161を参照。
- 5) 同上、pp.164-168を参照し、筆者が作成したものである。
- 6) 2013年3月15日に筆者が行った、校本教材開発における外部教材の導入方法に関する熊梅校長へのインタビューでは、以下の4点が指摘された。①校本教材の単元は、自主開発した単元、日本の東京書籍版「新しい社会」から導入した単元、全国版教科書から取り入れた単元という3つの部分から構成されている。②附属小学校は、中国東北地域の特色に基づき、「我々の学校」「都市・地域社会」「祝日」「春城の物語」などの小単元を独自に開発している。③日本の東京書籍版「新しい社会」は、中心的な主題による教科書を組織し、児童の社会問題を分析解決する能力の育成をねらい、体験性や実践性の強い総合的社会科であると考えられるため、その内容を参考にしている。④多様な全国版「品徳と社会」教科書から優れた単元を選択し、校本教材の目標に合わせ、単元を再構成している。